って，東南アジア諸国では，しばしば政治が経済に優先する。

ともあれ，本書は，なぜタイが東南アジア諸国のなかで堅実な経済成長をつづけえているかに答えるための，最もすぐれた研究である。わたくしは，タイ経済についての文献として本書を推賞する。（本岡武）

Komando Operasi Tertinggi : "*Madju tersu……Pantang mundur!*" Diakrta 1964. XI+249.

本書のサブ・タイトルは Kisah pendakian Puntjak Sukarno（スカルノ峰の記録）とされている。これは，1963—64年におこなわれた日本・インドネシア合同探検隊による西イリアン中央高地の探検および，スカルノ峰（旧名・カールステンツ峰5030m）登頂に関するインドネシア側の公式報告書である。

この探検隊の日本側名称は，京都大学西イリアン学術探検隊予備踏査隊であり，加藤泰安隊長以下，京都大学を中心とする10名の隊員により構成され，日本側主催団体は，京都大学生物誌研究会である。インドネシア側では，Ekspedisi Operasi Tjenderawasih（ゴクラク鳥探検作戦）とよばれ，最高指揮者はスカルノ大統領であり，直接の担当機関は，本書の編集出版をした統合作戦本部であった。

ついでながら，インドネシアではニューギニアを Tjenderawasih（ゴクラク鳥）の形にたとえており，ヘールフィンク湾は現在では，チャンドラワシ湾とよばれている。主要な地名の多くは，インドネシア流に改名されているので，インドネシアの西イリアン関係の文献を読む場合には注意が必要である。

本書のタイトル・madju terus……Pantang mundur!／は「前進あるのみ……退却はゆるさず。」と訳される。これは，探検隊のうち登山班が悪天候にはばまれ，スカルノ峰登頂があやぶまれていたときに，大統領よりベース・キャンプにむけてうたれた無電の文よりとったものである。このことよりも，考えられるように，インドネシア政府の本探検隊への熱のいれようは大変なものであった。解放後，これといって明るいニュースがなかった西イリアンを国民に対してアッピールする絶好の手段として，今回の探検隊が用いられたわけである。したがって，本書のところどころ，とくに登山班の記録のなかにはナショナリスティックな性格があらわれる。インドネシア政府にとっては，今回の探検の第一の目標はスカルノ峰へ登頂することであり，学術調査は第二義的なものであったらしいが，これは独立まもない若い国としては無理からぬことせねばなるまい。

さて，本探検隊のインドネシア側隊員はA. Hamid隊長以下45名であり，登山班・無電班・護衛兵のほかに，地形学者・地質学者・気象学者・文化人類学者・動物学者・植物学者・軍医・映画技師により構成されていた。日本・インドネシア双方とも，全隊員は登山班と科学班にわかれ，各々の班は別々に行動した。

本探検隊の主な目的とした探検ルートは，パニアイ湖畔のエナロタリより，ビオガ部落，スカルノ峰にいたる，ケマブー河，ローフアエル河上流にそった地図上の直線距離にして，東西150km におよぶ標高1500m 以上の山岳地帯である。このルートの一部は，1938年オランダの Le Roux を隊長とする地理学的探検隊と重複しているが，その他の地域は科学上の処女地をカバーしている。たとえば，本探検隊の接触した部族には，カポーク族・モニ族・西部ダニ族・ウフンドニ族があるが，このうち民族学的モノグラフがあるのは，パニアイ湖畔のカポーク族のみで，あとの諸部族についての調査は，ほとんどない。

本書の序文には，スカルノ・スバンドリオ・セニ陸相・ボナイ西イリアン総督が名をつらねている。前半の第一部は，登山班の行動記録およびスカルノ峰登頂記録よりなる。このうち，エナロタリよりビオガ部落にいたる日記体の行動記録は，信頼するにたる紀行や地図のないこの地域へ入ろうとするものにとっては，手引きとして使用し得る情報を含んでいる。

後半の第二部は，科学班の行動記録・地形地理学・気象学・地質学・植物学・動物学・植物生態学・住民の居住分布・住民の健康状態の各章よりなっている。各章は数ページより十数ページの短い論文よりなる予報的性格のものであるが，探検終了後，数カ月にして本書を出版したことには敬服せねばなるまい。

自然科学にうとい，わたしには正当な評価はできないが，本書のうち最も重要な部分の一つは，地質学の章であろう。バンドンの地質研究所からは所長以下，3名の地質学者が本探検隊に参加し，インドネシア側科学者のうち地質学者たちが最も精力的に調査をしていた。巻末にはルートにそった地質図がつけられてい

るが，スカルノ連峰北側の地質調査はこれがはじめてであり，山脈南側に関するオランダ人の業績とあわせて，ニューギニア背稜山脈の構造の解明に大いに役立つにちがいあるまい。

また本探検隊は海岸の熱帯降雨林，中央高地の森林，森林限界をこえ氷河の上にいたるまでのさまざまな環境を経験しているため，植物学・植物生態学の章は専門家にとって熱帯における植物の垂直分布に関して興味ぶかい資料となることであろう。

西イリアン中央高地における，最も興味ぶかい問題である山地パプア族の文化人類学的研究についてのインドネシア側隊員の見解が，本書に見あたらないのは残念なことである。

現在，インドネシアではオランダ人の手になる過去の西イリアン研究の業績をアレンジして，インドネシア語論文で紹介することが盛んであるが，本書はインドネシア人の手による西イリアンの現地調査記録の最初として大きな意義をもつ。

今回の探検ルートが，未探検地域であった地帯を多く含むことよりしても，予報的性格の本書のみでなく，インドネシア側各隊員の専攻分野に関する本報告が，国際的学術雑誌に発表されることが望まれる。

なお，京大側の公式記録は，「西イリアン中央高地」のタイトルで本年中に，生物誌研究会の手により出版される予定である。また，資料整理がすみしだい，昆虫学・地質学・民族学に関する英文報告が京大側隊員により出されるであろう。また，本多勝一・藤木高嶺，「ニューギニア高地人」(1964年)に今回の探検で明らかになった民族学的考察が含まれている。(石毛直道)

*M*alaysian Sociological Research Institute (A nonprofit organization): *INTISARI*(*The Research Quarterly of Malaysia*), Singapore. Vol. I, No. 1-Vol. II, No. 1. (発行年月不明)

マレーシアのシンガポール，クアラ・ルンプール，ペナンには，Malaysian Sociological Research Institute (MSRI) と呼ばれる事務所がある。それは，余り目立った存在ではないから，マレーシアに3，4カ月滞在しても，つい見逃し易い。MSRI が1961年に発足してから，まだ余り年月もたっていないせいかも知れない。しかし，MSRI の刊行物は，マレーシアのすみずみで，どのようなことが社会問題となっているかを理解する上に便利であり，マレーシアの知識人や青年の間で可成り注目されている。その主要な刊行物の一つが，季刊雑誌 INTISARI である。

Intisari とは，サンスクリットに語源を持つマレー語で，「本質」とか，「事物の核心」という意味の言葉らしい。つまり，季刊誌 INTISARI の目的は，マレーシアの現実を直視して，その現実に生ずる諸問題の核心を理解しようとする点にある。編集者はShirle Gordon 女史で，主要な執筆者はマレー人の知識人である。掲載論文も，詳細な脚注をつけた力作が多い。

第1巻第1号は，既に品切れで，残念ながら，筆者はそれを手にすることは出来なかったが，マレーシアの複数社会におけるイスラム教の位置を多角的に検討するという問題を中心とした論文が掲載されたらしい。第2号は，マレー人の土地所有の在り方を中心にした特集号で，「マレー農民の零細化と耕地の細分化」，「マレー人の土地保護法」，「協同組合運動」，「Puasa (断食)の月と経済活動」など，いずれもマレーシアの社会問題の核心をえぐるような論文を載せている。第3号では，イスラム教と adat に関する二つの慣習法の関係，対立，統合を主要テーマとする特集を行なっている。イスラム法と adat に基づく二つの社会的な力の矛盾，対立，混淆の理解は，マレー人社会構造の基底的な諸問題を理解する鍵であることは，周知の事実であろう。第4号も，第3号と同じ問題をモチーフとしていて，土地相続，断食の慣習やその他の事例を中心にイスラム法と adat の関係を論じた論文が多い。第2巻第1号の主題は，教育と言語に対するイスラム教の影響であり，「コーラン塾のマレー人の子供」「マラヤのイスラム教教育」，「農民とイスラム学校 (pondok)」，「マレー語とアラビア語の関係」など，いずれもマレー人社会を理解するのに主要な問題ばかりである。

以上の季刊誌の発行の他に，MSRI は，「マレーシア人」によるマレーシアの研究書を発行し，隔月には，上記に挙げた諸問題を一般の人にも読み易く論じた機関紙を英語，(Seed)，マレー語，(Benih)，中国語 (Chungtze) の三つの言語で刊行している。これも興味をひく多くの論文を掲載している。

「マレーシアの中国人」，「マレー人とは」，「ムルト族」，「マレー人の起源」，「農民と zakat」，「南インドとマラヤ」，「マラヤのネグリト族」，「村落レベルのマレー人と中国人」，「マレー人特別法」などマレーシアの現実の理解には，一度は読むに価する論文ばかりである。(口羽益生)